

群馬地名だより

群馬地名研究会 会報

境町の蘭方医、村上随憲の川原湯温泉への旅

随憲の『河原行記』から、

江戸期の旅の一端をうかがう

須田 茂

1. はじめに

江戸の後末期、上野国佐位郡境町（群馬県佐波郡境町。現在は伊勢崎市に編入）に、村上随憲という蘭方医がいた。随憲は、老境期に各地を旅した。その一つに川原湯温泉（吾妻郡長野原町）への旅があった。その紀行記録が、『河原行記』として遺されている。ここで、その記録によつて、江戸期における旅の一端を垣間見てみたい。なお、本稿では、市町村名は平成の合併以前の形で表記する。

2. 村上随憲の、人となり

随憲（本名は、憲）は、寛政十年（1798）、武蔵国大里郡久下（くげ）村（埼玉県熊谷市）で生まれた。18歳の時、江戸に出て蘭方医学を学び、長崎でシーボルトからの教え

も受けている。文政十一年（1828）二月、長崎から郷里の久下村に戻った。31歳であった。一旦は本庄（埼玉県）で開業したが、境町の名主の中沢茂七の周旋で境町の仲町（なかつよう）に医院を設けた。随憲は当時としては先進的な医療技術、つまりは種痘や麻酔などの技術を習得しており、外科の名医として、高い信頼を得たといわれる。随憲は、境町での開業の前に、伊勢崎の産科女医の高川氏の娘、真喜（まき）を妻とした。真喜は、19歳であった。随憲は真喜との間に、四男二女を授かった。男子は、宗俊（そうしゅん・時三郎）、秋水（しゅうすい・小一郎）、俊平、鼎二という。長男の宗俊は、文政十二年（1

829）の生まれ。江戸で蘭方医学を学び、境町で医業に就いたが、体質が弱く、安政元年（1854）、26歳で亡くなっている。二男の秋水は、天保六年（1835）の生まれ。兄と同じく江戸で蘭方医学を学んだ。随憲の医業を継いだのは秋水である。三男の俊平は、天保九年（1838）の生まれ。尊王運動に身を挺し、元治元年（1864）、京都で幕吏によつて斬殺された。26歳であった。四男の鼎二は、弘化三年（1846）の生まれ。随憲49歳の時の子である。最愛の末子であり、随憲は自ら鼎二に医学を教えた。長女の糸は4歳、次女の敏は5歳で亡くなっている（以上、年齢は数え、である）。

3. 随憲の旅

随憲は、医業の傍ら、旅に出ることも少なくなかった。しの木弘明の「村上随憲伝」（『境町歴史史料』165号・166号

合併号 平成元年）によると、安政五年（1858）に、秩父札所めぐり。安政六年（1859）に、真喜と川原湯温泉（以後、夫婦で毎年川原湯温泉へ）、さらに、赤城山と富士山への登山。万延元年（1860）に、川原湯温泉、庚申山登山、江戸への旅（以上の三旅は鼎二を従えている）。文久二年（1862）に、妙義山。文久三年（1863）に、富士山。慶応元年（1865）に、上野十二社参り。などが知られる。

『境町歴史史料』（161号・165号合併号 昭和63年）には、上記の一部にあたる紀行文が収載されている。すなわち、「長崎道中記」、「日光山往復雑費控」（安政三年）、「秩父道中日記」（安政牛年・1858）、「河原行記」（安政六年）、「江戸行入用覚」（万延元年）、「十二社巡経記」（元治二年・1865）等である。長崎への旅は、文政七年（1824）のことと